

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Study on the Design Development of Television Set and Kagu-cho TV in Japan

増成, 和敏

Shibaura Institute of Technology, College of Engineering and Design

<https://doi.org/10.15017/17126>

出版情報 : 九州大学, 2009, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

序章

1. 研究の目的

本研究の目的は、日本におけるテレビ受像機の草創期から普及期において、デザインが欧米製品からどのような影響を受けて変容したか、また、普及期から成熟期において日本独自のデザインとして主流となった家具調テレビが如何にして成立したかについて明らかにすることである。そして、個々の要因を生活者と生産者の視点から考察することで、欧米の影響を受けて導入された製品のデザインが、日本の生活に相応しい日本独自のデザインに変容した過程を明らかにしたい。

デザインを人工物に当てはめてみた場合、その意味するところのひとつはモノの外観であり、美意識と好き嫌いで論じられる面がある。もうひとつはモノを生産するために計画する行為である。すなわち、様々な条件を基に計画された結果は製品となって外観に現れる。デザインが変容する過程で差異が生ずるのは様々な要因があると考えられるが、その製品がつくられ、売られ、使用された時代と地域と人によるところが大きいと言えるだろう。

家庭用電気製品（以下、家電製品と略記する）のデザインについて、上記の観点より考察する際にテレビ受像機は典型的な研究対象となり得る。何故ならば、日本におけるテレビ受像機は、欧米製品の影響を受けて導入された機器であるが、現在では日本人の生活に浸透し、日本企業が開発を先導している製品だからである。また、導入期から普及期に至る間には三種の神器のひとつとして生活者の憧れの製品であったことから、常に生活者からも生産者からも注目されてきたからである。

また、昭和40年代に生まれた家具調テレビは、日本独自の造形発想によるデザインで様式をつくったと言われている。欧米製品を模倣して開発され市場導入された製品が、時代と地域の文化を背景にして独自の様式を獲得するに至るまでのデザイン変遷と要因を考察する上で、テレビ受像機の草創期から家具調テレビが誕生し普及するまでを対象とすることの意義は大きい。

2. 既往の研究

生活に不可欠であり、産業にとっても重要な機器であるにも関わらず、テレビ受像機のデザイン変遷に関する専門的な研究は極めて少ない。したがって、論文以外でテレビ受像機及びテレビを取り巻く社会状況、生活文化について取り上げた文献（技術史、産業史、生活文化史に属するもの）も既往の研究として扱うこととする。

① 『テレビジョン』（曾根有，岩波書店，1934）

1934（昭和9）年発行の書籍であり、テレビの実用化以前の技術開発史が記録されている。著者の曾根は、逓信省・電気試験所（その後の通産省・電子技術総合研究所、現在の独

立行政法人・産業技術総合研究所)でテレビジョンの研究をしている。画面を映し出すデバイスとして当たり前のように思われているブラウン管についても、いくつかの方式の検討により残ったものであり、もしも異なる方式が現在に継承されて開発されていたらテレビ受像機のデザインも異なったものになっていたであろう。新たに発明された機器は、機能を実現する原理によってデザインも大きく方向づけられたことが開発当時の写真記録より推測できる。

② 『工芸ニュース Vol. 21-5』(知久篤, 工業技術院産業工芸試験所, 1953)

テレビ本放送が2月に始まった1953(昭和28)年5月に発行された『工芸ニュース』で、産業工芸試験所意匠部の知久篤は、「一般にわが国メーカーは特に海外のメーカーと技術提携しているところが多く、相手メーカーの技術と共に機械、キャビネットも輸入し、これをまず第一のデザインの基盤として生産に移しているようである。ためにこれら相手メーカーの影響を多少にかかわらずデザイン上にも受けているとみてよい」とした上で、扉付のキャビネットデザインを提案している。この時点で既にテレビキャビネットデザインを分類して、ポータブルタイプ、テーブルタイプ、コンソールタイプ、コンビネーションタイプ(電蓄、ラジオとの組合せ)、ビルト・インタイプ(建物の一部にはめこむ)としており、これらのタイプに扉付の有り無しがあるとしている。

③ 『住宅近代史—住宅と家具—』(太田博太郎編, 早川正夫, 小泉和子著, 雄山閣出版, 1969)

日本住宅の洋風化と近代化について、明治、大正、昭和の多くの住宅事例をもって論じている。戦後の住宅環境の変遷については、椅子式生活様式の推進と共に伝統的和風空間の消滅を挙げて現在に至るモダンリビングの形成について述べている。その中で、住生活と電化革命と題して電気洗濯機の影響とテレビの普及がリビングルームに与えた影響について、「たちまちにして家族団欒の中核的存在となってしまった。テレビをどこに置くかでその住宅の生活の中心が決定する」としている。

④ 「日本の電気製品デザイン 1950-1980」『DESIGN NEWS 120-121』(日本産業デザイン振興会, 1981)

(社)日本電子機械工業会 電機意匠委員会によって1950(昭和25)年~1980(昭和55)年までの主たる電気製品デザインの変遷が年表にして紹介されている。テレビ受像機については、コンソールタイプ・テーブルタイプ、ポータブルタイプ、プロジェクションタイプで分けている。その中で、松下電器「嵯峨」を「日本風スタイル・ネーミング」の代表とし、その後の代表的なスタイルとして「ダニッシュモダンスタイル」「高級家具調」「家具調/木目調」の呼称が使用されている。

⑤ 『テレビ事始—イの字が映った日』(高柳健次郎, 有斐閣, 1986)

日本におけるテレビの創始者と言える高柳健次郎自身が関わったテレビ開発の記録である。草創期のテレビ方式が決まる過程での技術的要因について詳細に記録されている。興

味深いのは、1930（昭和5）年5月に浜松高等工業学校で行われた昭和天皇の展覧時における受像装置の外観写真である。実験段階とはいえ、展覧の場に出すために設えたのは家具を模した外観であったことから、発明初期より家庭内に持ち込まれることを想定していたと推測できる。機器が発明される初期におけるデザインの成立を知る上で、貴重な資料となっている。

⑥ 『テレビ文化の社会学』（井上宏，世界思想社，1987）

テレビを文化史の視点から考察している。テレビ受像機の普及は社会的イベントによって高まり、テレビによって育った「テレビ世代」が社会をつくっているとして、テレビを社会のひとつの存在として捉え、与えた影響について多方面から考察している。テレビは、都市と農村、日本と世界、性別、年齢、学歴、職業、などの層別文化の境界を突き崩し、曖昧化した。こうしたテレビの「越境性」が、大衆文化を生みだし、形成するのに大きな役割を演じたと見ている。

⑦ 『テレビ We are TV's children』（伊藤俊治編，井上章一著，INAX出版，1988）

テレビ受像機のデザイン変遷を1927（昭和2）年から1985（昭和60）年まで概観することで、生活空間や生活者の意識の中でテレビが占めてきた位置について考察している。家具調テレビについては、真空管からトランジスタへの技術移行期に生まれたもので、テレビ受像機が高級なものであったときのステイタスシンボルであったとしている。また、家族団欒の中心にあり茶の間のシンボルであった家具調テレビが消えた理由として、生活空間の洋風化によるテレビ受像機のインテリアへの埋没と和風デザインが合わなくなったためとしている。家具調テレビを取り上げ生まれた理由についても推測しているが、詳細な経緯については調査されているとは言えない。

⑧ 『家電製品にみる暮らしの戦後史』（久保允誉編，ミリオン書房，1991）

テレビ受像機を、「不思議なブラック BOX という感覚が薄れて いつの間にか暮らしの中心に座を占めたテレビ」として、1953（昭和28）年に日本放送協会（以下、NHKと略記する）がテレビ本放送を始めた当初の受信契約886件のうち過半数の482件のテレビ受像機はアマチュアの自作によるもの、残りの多くが輸入製品であったことが紹介されている。その後、白黒テレビ受像機は14インチ¹⁾が主流となり普及するが、カラーテレビ受像機は高価であったために普及が伸び悩んだとしている。

⑨ 『産業の昭和社會史 家電』（青山芳之，日本經濟評論社，1991）

昭和を中心に家電産業の変遷についてまとめ、社会生活に如何に関わり、生活を変容させたかについて考察している。テレビ受像機については、街頭テレビから普及がはじまるが高価であったために家庭への普及は進まなかったことが紹介されている。一般家庭への普及に疑問がある中で、テレビ受像機の供給については、国産か輸入かの論争もあったが、先進国からの技術導入により短期間で日本メーカー各社は、製品化を果たしたとしている。しかし、日本製テレビ受像機のデザインが受けた影響については言及していない。

- ⑩ 『欲望のオブジェーデザインと社会 1750 - 1980』（アドリアン・フォーティ，高島平吾訳，鹿島出版会，1992）

副題に「デザインと社会 1750-1980」と掲げている本書においてテレビ受像機が取り上げられていないのは大変残念であるが，ラジオについては取り上げられている。ラジオは大衆規模で所有された最初の電気器具であり，「ファニチュア・デザインを使った最初の電気器具のひとつ」としている。その理由としては，メーカーによる技術革新が成り立たなくなり，高級品でしか配慮されていなかったキャビネットのデザインに目を向けたとしている。そして，テレビの場合も同じであるとした上で「ラジオ・キャビネットのデザインにファニチュアとしてアプローチすることには，放送の仮想現実を現実存在する人工物と融和させるという点で大きな意味がある」として，「なじみのない媒体をひとびとの家庭にもちこむことが容易になった」としている点は，家具調デザインがテレビ受像機に採用されたことと同様の視点であり大変興味深い。

- ⑪ 『日本のテレビ産業—競争優位の構造—』（平野厚，ミネルヴァ書房，1994）

同名の論文を書籍にしたテレビ産業史である。日本産業の強い国際競争力を代表するテレビ産業の優位性がどのようにして生まれたかを製品技術，製造技術に関する膨大な資料と調査により解明しようとしている。テレビ受像機の普及過程については，国産ブラウン管として14インチを選択して量産し普及したこと。カラーテレビの製品開発については，対米輸出によって加速するが二重価格問題と消費者運動が国内での普及を遅らせたこと，等を詳細に検証している。

- ⑫ 『テレビ人生—筋技術者の65年』（久野古夫，日経BP出版センター，2001）

著者の久野古夫は，高柳健次郎の門下であり松下電器においてテレビ受像機の開発に65年間携わった技術者である。内容は，松下電器がテレビ受像機の基礎開発を始めた1935（昭和10）年から2000（平成12）年までの期間を対象としているが，特に，草創期における企業での製品開発状況を知る上で貴重な記録である。しかし，コンソレットタイプについては，「取り外しができる四本脚を付けた日本独自のもの」（141頁）とし，本研究における調査結果とは異なる記述が見られるように，製品形態，デザインについての詳細は検証されているとは言えない。

- ⑬ 『再現・昭和30年代 団地2DKの暮らし』（青木俊也，河出書房，2001）

昭和30年代における団地での生活状況を千葉県松戸市の常盤平団地をモデルにして，そこで生活した小櫃亮の家族写真6700カットを丁寧に分析して紹介している。テレビ受像機については，1960（昭和35）年の写真では14インチのテーブルタイプ，1970（昭和45）年の写真では16インチのコンソレットタイプが共に4本の丸脚付であることが確認できる。時代の流れと共に家具とテレビ受像機は移動しているが，テレビ受像機のある部屋が家族団欒の場となっている。また，どの写真でもテレビ受像機の天板には置物があり飾棚になっている様子が確認できる。

- ⑭ 「国産初のカラーテレビ受像機の開発」『映像情報メディア学会誌 Vol. 57 No. 10』（中村信英，映像情報メディア学会，2003）

国産カラーテレビ受像機誕生の背景とその影響について，筆者自身が設計に携わっていた東芝での開発を中心に報告している。特に，キーコンポーネンツである受像管（ブラウン管）の開発については，当時の RCA 製 21CYP22 が丸型であったのに対して，国産 17 型 430AB22 は角型で開発された経緯が紹介されている。

- ⑮ 「家具調テレビの登場」『図説・東京流行生活』（新田太郎，河出書房新社，2003）

家電製品の変遷を流行と捉え，生活者の視点から取り上げている。テレビ受像機については，家具調テレビを，かつて普通にあったものが今は見かけることのないデザインとしている。松下電器の「嵯峨」をはじめとする和風ネーミングの家具調テレビについて，新聞広告資料と販売実績より分析している。家具調テレビが生まれた理由としては，豪華さを求めた消費者の嗜好があったとしている。

- ⑯ 『テレビと日本人—「テレビ 50 年」と生活・文化・意識』（田中 義久，小川 文弥編集，法政大学出版局，2005）

テレビを人びとの生活スタイルに影響を与えてきたメディアとして，テレビ 50 年の歴史を 3 期に区分し，1953（昭和 28）年～1970 年代前半までを第一期，成長・発展期としている。この時期は，テレビが急速に日本人の生活のなかに浸透し，生活の中心になって様々な情報源，娯楽媒体として無くてはならないものとなったことから「高度経済成長のなか，テレビは，家族と一緒に見られる，家族団欒に役立つ，最も手っ取り早い娯楽メディア」としている。そのため，「多くの家庭ではステータスシンボルとしてテレビ受像機を床の間に飾った」と考察している。

- ⑰ 「商品名の命名メカニズム—家庭用電気製品「三種の神器」を例に一」『日本語の研究 第 2 巻 1 号』（蓑川恵理子，日本語学会，2006）

三種の神器を例にして，商品名をその構成要素に分解し，〈基本名〉〈タイプ名〉〈機能名〉〈固有名〉に分けている。テレビ受像機については，「ナショナル 人工頭脳 テレビ 19 型 パトラス」を代表例として説明し，時系列で構成要素の出現パターンを見ると 1966（昭和 41）年の〈固有名〉が 20 件で最も多いとしている。この時期は，テレビ受像機において「嵯峨」に代表される家具調テレビが主流となり和風ネーミングが広がった時期と重なるが，「嵯峨」，「日本」等の和風ネーミングについては言及されていない。

- ⑱ 『あこがれの家電時代』（清水慶一，河出書房新社，2007）

昭和 30 年代に三種の神器と言われたテレビ，洗濯機，冷蔵庫から昭和 40 年代に新三種の神器（3C）となったカー，カラーテレビ，クーラーまでを対象に製品の変容と生活者の意識変化を経済環境，住宅環境の変化と共に紹介している。特にテレビ受像機については，家電への憧れを象徴するものとして，日本人の生活や文化に深く根を下ろし，影響を与えた家電製品の代表としている。

3. 研究方法と対象

本研究は、文献史料調査を中心に行う。日本におけるテレビ受像機の普及期から成熟期において高い販売占有率を占めるメーカーのひとつであった松下電器²⁾を中心に国内、海外各社の製品を対象とする。製品開発は、購入者である生活者に受け入れられることを第一に考えて行われるため、その結果としての製品からは、当時の生活者が求め受容した価値観、生活様式について知ることができる。

製品の調査は、新聞広告、カタログ、社史資料を中心に行うが、現物についても極力観察調査をするよう心掛ける。具体的には、1953（昭和 28）年から 1976（昭和 51）年までの松下電器の全機種を社史資料より抽出し年譜として資料化し、デザイン変遷を概観する。各社の製品については、『毎日新聞』『朝日新聞』『読売新聞』の広告より抽出する。特に、個々の機種についてだけでなく、その前後に発売された機種との関係を見ることで、デザインに反映された生活者の要望と受容された経緯について考察する。生産者側からの発信情報だけでなく、新聞記事、普及率等より、テレビ受像機を取り巻く社会状況を把握し、生活者の受容の過程について推論を加える。また、製品開発、デザイン開発の経緯については、当時のテレビ受像機のデザイン開発を担当したデザイナーにヒアリングを行い、資料による情報の確認と補完を行う。

家具調テレビについては、松下電器の「嵯峨」を中心に、各社の家具調テレビのデザインについて、意匠公報、新聞広告、カタログ、社史資料で調査する。意匠公報からは、意匠出願日よりデザイン創出の文脈、デザインの影響関係について検証する。新聞広告、カタログ、社史資料からは、デザイン意図、開発背景について考察したい。

創作者へのヒアリングについては、当時の創作経緯を知る上で貴重であるが、記憶による不明確な点もあるため資料による確認を合わせて行う。

以上より、草創期から普及期を経て成熟期に至るテレビ受像機のデザイン変遷について可能な限り正確に検証することを試みる。

① 書籍史料

書籍史料については、テレビの開発が始まった昭和初期より近年までのテレビとテレビ受像機を中心とした家電製品に関連したものについて、幅広く見てゆく。テレビ受像機は、住空間、生活空間との関連が深いことから住宅史、生活史に関しても参照する。また、テレビが社会、生活に与えた影響については、社会史に関しても参照する。

② 雑誌史料

雑誌史料については、以下の 2 文献を中心に取り上げ、下記期間について通読閲覧調査する。その他の雑誌史料についても、適宜参照する。

『アサヒグラフ』: 1953（昭和 28）年～1970（昭和 45）年

『工芸ニュース』: 1953（昭和 28）年～1970（昭和 45）年

③ 新聞史料

新聞史料については、以下の3紙に掲載された広告を、下記期間について閲覧調査する。

『朝日新聞』：1945（昭和20）年～1984（昭和59）年

『讀賣新聞』：1945（昭和20）年～1976（昭和51）年

『毎日新聞』：1945（昭和20）年～1976（昭和51）年

広告以外のテレビ関連記事については、『朝日新聞』を1945（昭和20）年～1984（昭和59）年の期間について通読し、必要に応じて他紙についても適宜参照する。

④ 特許文献

特許文献については、国内文献については特許庁の特許電子図書館をを利用し、資料の収集を行う。

⑤ テレビ受像機製造企業社史

松下電器テレビ事業部門の社史を中心に、テレビ受像機を製造していた家電各社の社史についても、適宜参考資料として閲覧する。また、昭和40年代の企業内デザイン開発の状況を知るために、松下電器デザイン部門が発行していた社内誌月刊『NATIONA DESIGN NEWS』を参照する。

⑥ ヒアリング調査

昭和30年代から40年代に、松下電器デザイン部門でテレビ受像機とステレオを担当したデザイナーに対してヒアリング調査を実施する。

上記文献調査とヒアリング内容を照合することで総合的な考察を行うよう努める。なお、調査期間を昭和50年代までとしたのは、家具調テレビがカラーテレビ受像機においても主流となり、成熟期を迎えるまでを対象とするためである。

4. 研究の構成

本論では、図0-1に示すとおり、日本におけるテレビ受像機のデザイン変遷については、第1章、第2章で時系列に考察し、家具調テレビの成立については、第3章、第4章で経緯について考察する。

「第1章 テレビ受像機の草創期から普及期」では、日本におけるテレビ受像機の草創期から普及期に至る状況を明らかにするために、1953（昭和28）年のテレビ本放送開始前後から昭和30年代を中心に新聞・社史・公報文献等の史料と当時のデザイナーへのヒアリングより考察を行なう。

「第2章 白黒テレビ受像機の成熟期からカラーテレビ受像機の普及期」では、欧米製品の影響を受けたデザインが日本独自のデザインに変容する過程について明らかにするために、昭和40年代を中心に新聞、社史、公報文献等の史料と当時のデザイナーへのヒアリングより考察を行なう。昭和50年代についても、家具調テレビの衰退経緯について考察を加える。

「第3章 家具調テレビの誕生と展開」では、「家具調」と「家具調テレビ」の呼称が生

まれた経緯について、新聞、社史より明らかにし、家具調テレビの典型とされる「嵯峨」の誕生とシリーズ展開について詳細を明確にする。

「第4章 家具調テレビのデザイン創出過程」では、家具調テレビの典型とされる「嵯峨」について、家具調ステレオ「飛鳥」との関係、校倉造りの造形イメージの形成について検証し、日本調デザインとされる家具調テレビの創作経緯について、文献史料とヒアリングより明らかにする。

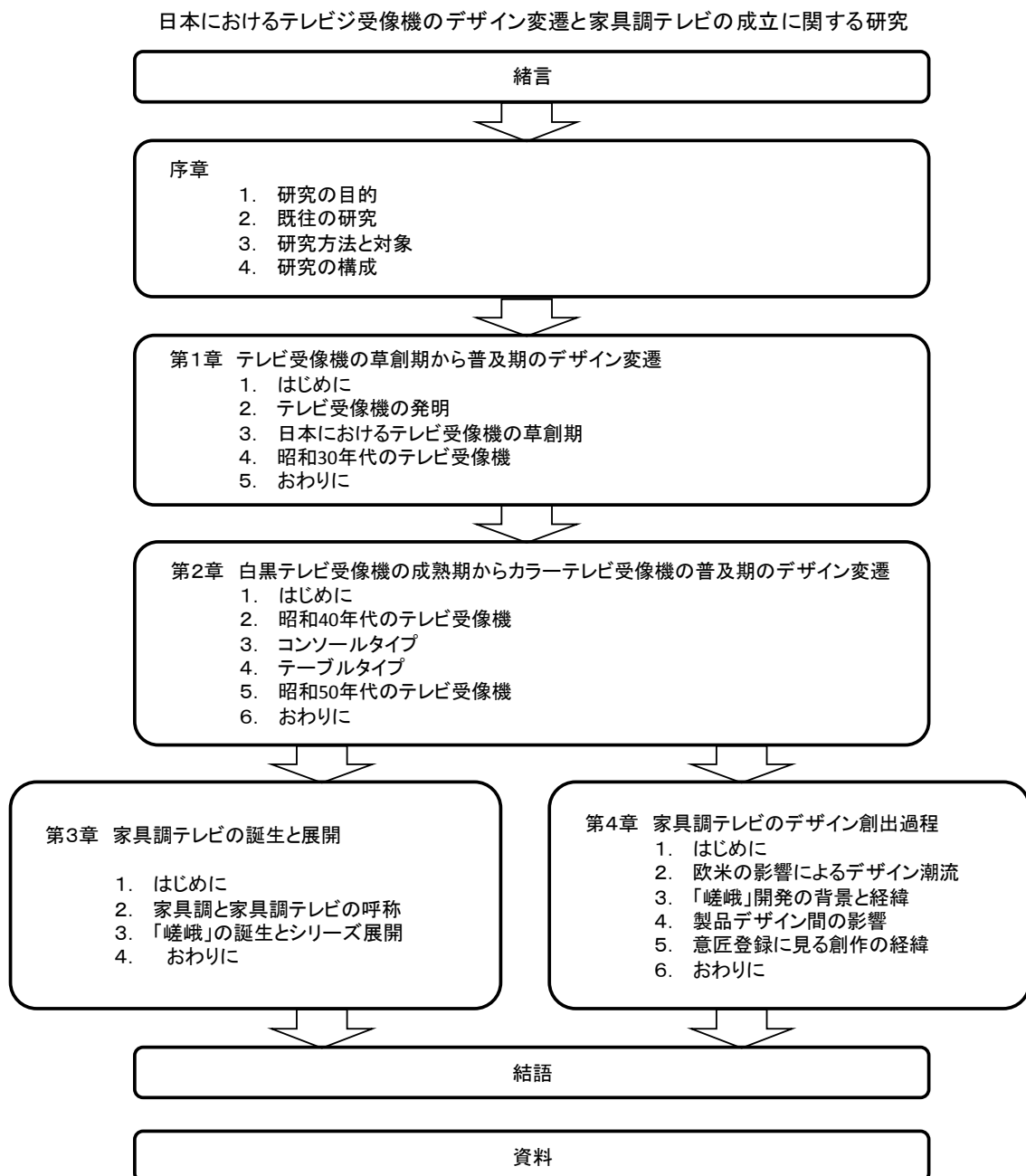


図 0-1 研究の流れ

以上，第 1 章から第 4 章までを通じて，日本におけるテレビ受像機のデザイン変遷と家具調テレビの成立について，史料とヒアリングより得られた情報を手掛かりとして考察し，正確な経緯を再現し検証することに努める。

注

- 1) ブラウン管の画面サイズは、画面の対角線の長さで表される。表記方法については、海外から導入された経緯より草創期はインチで表記されている。『NHK年鑑』では、1959(昭和34)年より「形」または「型」が使用され、現在では「型」がメーカー表記として使用されているが、本論では、画面サイズをイメージし易いことから草創期に使用されている「インチ」を使用する。
- 2) 『テレビ事業部門25年史資料』(松下電器産業株式会社, 1978)によると、松下電器は、1957(昭和32)年以来、販売占有率は常に20%近くあり、「嗟峨」発売を契機として1966年からは20%以上の販売占有率を占めて業界首位を維持しているメーカーである。